

《第10回図書館総合展》

第10回図書館総合展参加記

関口 千登世 (城西大学)

2008年11月26日から3日間にわたり、第10回図書館総合展がパシフィコ横浜で開催された。今回11月28日に行われた紀伊國屋書店主催のフォーラム「図書館とライブラリアンを元気に変える！—その活性化戦略の裏側—」に参加できたので、報告をさせていただく。

はじめに慶應義塾大学三田メディアセンター事務長、石黒敦子氏による「広報マインドで図書館活性化戦略を！」を拝聴した。他部署への異動で図書館を客観視する機会を得、「使いづらい図書館」、「金食い虫」、「経営感覚のなさ」などを発見することができた。これらを現実として受け止め、前向きに取り組んできた。広報効果は利用者に及ぶだけでなく、予算獲得や他部署との連携により実現できることも少なくないので、その機会を逃さないという点でも、教職員へのアピールはとても大切である。広報によって付加価値を与えられたとして下記の取り組みを紹介された。

- ・「Google ブック検索図書館プロジェクト」への参加表明の記者会見や取材対応で、図書館をアピール

- ・図書館系以外の雑誌への投稿を促進し、図書館員という殻から抜け出す（図書館以外の世界へ目を向ける）

- ・創作者福澤諭吉のアピールとしてデジタルギャラリー「デジタルで読む福澤諭吉」を作成、2007年度私立大学図書館協会賞を受賞

このデジタルギャラリーに関しては、トップ画面の福澤諭吉の写真を私たちがよく目にするものではなく、29歳の時に^{ロンドン}倫敦で撮影された得意満面の若き日の写真を使ったという工夫や、締め切り3日前のエントリーだったこと、完成したのが授賞式直前だったことなど驚くべきパワーを感じ

られるエピソードも話された。こういった頑張りは広報効果だけではなく、これによって得られた自信が若手図書館員の成長にもつながっている。また、広報資料作りのポイントについても話され「三田メディアセンターニュース」作成の際にも生かされている“見出しは簡潔かつインパクトを持たせる”，“時には遊びも必要である”，“全部くまなく語らずに読む側に想像をさせる”など大変参考になった。自分で作成する際も情報を盛り込みすぎたり、図書館用語ばかりを並べてしまうなど、図書館側からの見方しかしていないものを作ってしまう点を反省した。今後の図書館員の働き方として，“学内情報通になる”，“経営感覚を持つ”，“将来の顧客を意識する”点を指摘された。

次にお茶の水女子大学図書・情報チームリーダー、茂出木理子氏による「お茶大図書館元気のヒ・ミ・ツ！」を拝聴した。自分の職場が好きか？ 自分の図書館やスタッフ（上司は部下を部下は上司を）を自慢できるか？ 仕事の食わず嫌いをしていないか？ という内容に、思わず自分はどうか？ と考えてしまった。毎日過ごしている場所だから、好きでないと良い仕事もできないのは当然である。良い仕事（好きな職場）や自慢できるスタッフだからこそ、元気に働ける。話題のラーニング・コモンズやキャリアカフェの設置などの多くの“頑張ってきたこと”も紹介され、それらの成功につながっている下記の3点について話された。

- ・チーム全員の連絡会
- ・チーム研修会
- ・チーム内課題解決プロジェクト

これらには非常勤職員も含むチーム全員がかかわり、それぞれが“リーダー”になるよう取り組

んでいるとのこと。チームの若手スタッフからの声として「周りから理解されていると感ぜられる環境」,「気がついたことはまずやってみるという雰囲気」,「目的や課題を共有していると感じることによって不安や孤独感なく仕事ができる」という元気のヒミツが紹介された。また,『『赤鼻のトナカイ』で考える元気な職場』と題して,ライトの代わりになる赤鼻のトナカイを見出し,かつトナカイ手当ても獲得したチームリーダーサンタの話に会場も盛り上がった。

司会者からお2人へ学内評価はどうかという質問があり「他の部署の職員からこういうことを一緒にやらないかと声をかけられるようになった。教員が図書館に関心を持ち始めている。」(石黒氏),「いい意味の金食いになっている。投資した分が評価につながっている。」(茂出木氏)と話された。また,若手ライブラリアンへの一言では「プライド(専門性)を捨てずに,殻にこもらずに,バランス感覚を大事にしてほしい。」(石黒氏),「図書館を知ってほしいなら自分も他部署をよく知ること。新築や改装などで新しくなった図書館にふさわしいおしゃれな図書館員になってほ

しい。」(茂出木氏)と話された。

今回のお2人の講演を聴き共通する点は,個々人の活性化が組織の活性化につながるということだ。スタッフそれぞれの良いところを見出し伸ばせば,同じ目標に向かいながらも持ち味を生かした仕事ができ活性化につながる。そして私たちが相手をする学生のこと(授業だけではなく学生生活全般)をよく知らなければ,学生にとっての図書館はどのようなものなのかも受け取ることができない。また,図書館以外の世界に目を向けるといふ点も共感できた。かけ離れた業界,例えば注目されるショップやホテルがどんなアイデアによって集客力を伸ばしているのかなど,参考にしていけることは限りなくありそうだ。利用者を理解しそれにあったサービスを見出すことができれば,茂出木氏のお話にもあった“ティファニーの粋な計らい”もできるのではないかと思う。図書館員である自分たちが元気でなければ,図書館とそれを利用する人たちを元気にすることはできない。お2人の前向きでホットなお話にタイトルどおり元氣になれたフォーラムであった。

(原稿受け:2009.1.29)

齊 藤 稚 穂 (東京薬科大学)

2008年11月26~28日の3日間,第10回図書館総合展が開催されました。社会人になって10カ月,図書館員としてデビューしてまだ半年足らずの私にとって,図書館展への参加は学生の頃からのちょっとした憧れであり,まだまだ不慣れな出張という特別業務でもあり,緊張と期待に胸をふくらませて最終日の28日に参加しました。

午前中に,国立国会図書館が主催する「図書館員の知を活用するーカレントアウェアネス・ポータルとレファレンス協同DBを中心にー」を拝聴しました。前半はカレントアウェアネス・ポータルの特徴や活用方法について紹介がありました。カレントアウェアネス・ポータルは図書館に関することや図書館に影響を強く与えそうな行政政策,IT事情などの情報を国内外から集めた情報

サイトです。後半のレファレンス協同データベースは,館種を越えて図書館同士がレファレンス業務で助け合うことができるようにすることを目的に作られた,オンラインの双方向性データベースです。このシステムによって,自館だけでは解決が困難であったレファレンス内容を,他の参加館の協力を得て解決させることができます。

今まで,どちらのツールもなんとなく知っていたという程度でしたが,フォーラムに参加することで,具体的な活用のイメージを持つことができました。新米図書館員の私としては,積極的に活用し,早く一人前になれるよう勉強しなければと思いました。

午後は,日本医学図書館協会と日本薬学図書館協議会が共催する「市民・情報専門職のための薬